

人との繋がりを感じられるデザインを。  
遊び心を大切に、



第5回は Creative DUO NOGAN のお二人、浅野宏治さんと茂木隆宏さん。自分達のデザインや企画を通して地域の人々を繋げる様々な機会や場づくりに取り組んでいるお二人。キャンドルナイトにシェアオフィス、果ては屋台やおでんまで…そのユニークな試みの数々に通底する想いとは？

## ◆「デザインを通して人々を幸せに」 学生時代の相棒との新たな挑戦

「とにかく二人とも、おでんをやりたかったんですよ（笑）」

デザイナーがどうしておでんを？と、普通の人なら疑問に思うような企画「ノガンのおでん」を始めとするユニークな企画の数々を手がける NOGAN の浅野宏治さんと茂木隆宏さん。信頼関係を感じさせるような穏やかな雰囲気が取材中も感じられたが、二人は学生時代からの友人だという。

「大学に入学してすぐの教室でたまたま隣り合わせで座ったのが出会いで、それからいくつかの活動と一緒に手がけたりしていました。」

学生時代、浅野さんは空間設計などのインテリアデザイン、茂木さんはイラストなどのグラフィックデザインと、異なる分野で学んでいたこともあり、卒業後はそれぞれ就職し、しばらく別々の仕事を続けていた。しかし久しぶりに連絡を取り合ったことをきっかけに意気投合。一昨年から準備をし、昨年4月に NOGAN を立ち上げた。

「ただ仕事を引き受けて売れるものをデザインするだけでなく、自分達のデザインしたものを通して人々を幸せにしたり、社会に何か変化を起こしていけないか。そんな想いを学生時代からずっと共有していたんです。」

くすぶる想いを抑え切れず、二人の若手デザイナーの新たな挑戦が始まった。

## ◆寿町との出会い、キャンドルナイトで人々に笑顔を

二人が新たな仕事場として選んだのは横浜。横浜で活動している知人が多かったこともあるが、何より大きかったのは、寿町の存在だという。

「横浜と聞いて人々がイメージする、みなとみらいのような華やかさと対極にある、寿町の印象がずっと頭から離れなかったんです。」

自分達のデザインを通して寿町に何か変化を起こしたい、そのためにも寿町の中に入り込んで、町のことをよく知らなければならぬ。そう考えてオフィスを寿町に構えることにしたが――

「治安が悪いという先入観がある一方、寿町のために何かしなければという気負いもありました。」

しかし、昨年11月に開催を予定していた「寿灯祭 (KOTOBUKI CANDLE NIGHT)」の準備を進めるうち、心境に変化が。

「イベントで使う廃ワンカップを集めるために町の人と毎日言葉を交わすうちに、だんだん打ち解けてきて…その時、これまで寿の人々のことを自分の印象で勝手に決めつけていたんだと気付かされました。それからは寿町とより素直に向き合うことが出来るようになってきましたね。」

町中から集めた廃ワンカップは1200個になり、子どもからお年寄りまで多くの人々が灯絵を描いてキャンドルに仕上げるという、寿町の特徴を素直に引き出したイベントとなった。たくさんの人々の協力を得て実現したキャンドルナイト。世代を越えた交流も生まれ、人々の心にも温かな光が灯った。

## ◆「屋台」と「おでん」、異世代を繋ぐ温故知新のアイデア

「ノガンの屋台」と「ノガンのおでん」も、世代を越えた交流を生み出すユニークな試みだ。コミュニケーションツールとして屋台を貸し出す「ノガンの屋台」。移動式の簡易な設備でありながら、それ一つで人々が集う空間を創り出せるという面白さに着目し、処分される直前の屋台を自分達で修繕・手入れして活用している。大人にとっては懐かしく、子どもにとっては新しい、そんな屋台を大切にしたい…二人の想いが通じてか、大人も子どもも楽しそうに屋台に集い、交流も広がっているようだ。

「ノガンのおでん」は、間借りした様々なスペースで、横浜の農家から直接仕入れた素材をおでんとして地元の人々に提供する企画だ。多種多様な素材が集まり一つの料理として調和しながら、それでいて個々の素材が自らの味を主張している。卵や大根、それぞれの素材の生産者と地域の生活者をダイレクトにつなげる「ノガンのおでん」はシンプルでストレートなメディアだと、二人は言う。

「おでんを囲む雰囲気が敷居を下げてくれるのか、お客さんが世代を越えて仲良くなるんですよ。」

当初は飛び込みで材料を購入させてもらっていたのが、最近は口コミで「ノガンのおでん」の存在が知られ、農家やお店の方から連絡が来るようになったそう。お互いの顔が見える範囲での生産と消費。まさに地産地消のルートを、おでんという日本の昔ながらの冬料理が作り出している。





## ◆「あるものに工夫や遊びを」、「繋がりを感じられる、人間臭いメディア」

多種多様な企画に通底するコンセプトを探ってみたところ、二つの柱が浮かび上がってきた。一つは、人との繋がりの中で仕事をしていくということ。どんなジャンルであれ、企画・デザイン・PR という流れの中で、その背後に実際動いている人々の姿が必ず見えるような仕事をしていきたい、NOGAN は言わば「人間臭いメディア」として地域に貢献していく存在でありたいと、二人は語る。

もう一つは、新しいものを創るばかりでなく、今あるものに遊びや工夫を加えることで価値や面白さを生み出すということ。

「展示会なんかで、表ではエコ商品を押し出していながら、それが終わるとすぐ設備も解体され、毎回大量のゴミが捨てられる様子を何度も見てきて、新しい商品を創り続けることって、本当に地球や社会にやさしいんだろうかと疑問に思っていました。」

「自分の中に持っている視点やアイデアを素直に活かして環境や素材に落とし込んでいく方が、意外と色んなことが出来るんですよ。」

と、リラックスした様子で二人は語る。

「闇雲に新しいものを追求するより、自分の得意とすることを活かしていくのが一番だと思います。」

これから市民活動を始めたいと思う人々に対しても、気負わず一歩を踏み出せるような温かいメッセージを発してくれた。

## ◆表現が人を繋ぐシェアオフィス、「八〇〇中心」オープン

そんな彼らのアイデアが存分に活かされた、デザイナーのためのシェアオフィス「八〇〇中心」が、2月3日、横浜中華街の入り口にオープン。「ノガンの屋台」もここに設置されているそう。入居したアーティストが空間を思うままに創作活動に使用することができ、退去時の原状回復義務も無い。一人のアーティストの足跡が時と共に少しずつ、壁に、床に刻まれていき、次のアーティストがその上に新たな色を塗り重ねていく。創作活動を通じて人と人が繋がる場。ここからどんな作品が世界へ飛び出していくのだろうか。

## ◆おでんのように味わい深いデザインで、社会に発信を

「これからも、デザインが社会にどう貢献出来るのか、答えを探し続けていきたいです。」

「その土地に根ざす価値あるものがデザインを通して社会ににじみ出していくような、そんな温もりのある企画をこれからも考えていきたいですね。」

作り手の愛情が、おでんを通して口の中でじわりと広がるように、土地に内在する価値が、二人のデザイナーの手を通してこれからも多くの人々の心へと染み渡っていくことだろう。

